

大正大学蔵『源氏物語』研究

——書写者の背景に見えるもの——

首藤卓哉

はじめに

大正大学蔵『源氏物語』（以下、大正本）は、様々な問題を持つている写本である。例えば、絵合巻の錯簡の問題や、複数の巻で、青表紙本系、河内本系、別本系の文章が入り交じっていたり、または、諸本にはみられない独自の文章がある点など、興味深い問題点が多くある。

本稿では、その中でも、大正本の書写者の問題について、考察し、論じていく。大正本の書写者について考察された論文、研究は、まだ少ないのが現状である。そして、書写者について研究することは、大正本の性質や、成り立ちを究明する上で、必須事項であると考えられる。さらには、書写者同士の関係を把握することは、大正本のみならず、書写をされた室町期の歌壇や文壇の、新たな部分の解明に繋がると考えているからである。

なお、本稿の書写者の表記は、断りがない限り、大正本の極札の表記に依る。

書写者

大正本には、各巻に極札が貼られており、それぞれの巻の書写者の名前が書かれている。⁽¹⁾（桐壺巻には、書写者以外にも、箱書きと外題を書いた人物の名の極札が貼付されている）これらの人物は、計四十名にもものぼり、その中には、関白、太政大臣、大納言といった公家、法親王、大僧都、大僧正などの僧、また、連歌師や、女性まで、幅広い人々で構成されている。以前、拙稿で⁽²⁾、歌人の宗祇を中心とした相關関係を指摘したが、本稿では、その時に課題として残った、天台宗との関係、公家を中心とし

た関係について考察していきたい。

大正本の書写者の中には、天台座主が三人も名を連ねている。梶井宮堯胤法親王（天台座主一六一世。以下、堯胤）、青蓮院宮尊鎮法親王（同一六三世。以下、尊鎮）、梶井宮應胤法親王（同一六五世。以下、應胤）である。また、和歌所堯孝法印（以下、堯孝）、堯孝門人堯惠（以下、堯惠）、堯孝門人堯憲（以下、堯憲）らも、天台の僧と推測される。さらには、實相院増運大僧正も（以下、増運）、天台の僧と考えられる。⁽³⁾なお、これらの人物以外にも、僧門関係者とみられる書写者がいる。勸修寺宮常信法親王（以下、常信）、相国寺聯輝軒就山（以下、就山）、大慈院大僧都らである。常信は真言宗、⁽⁴⁾就山は臨濟宗の僧侶である。大慈院大僧都についての詳細は不明である。⁽⁶⁾このように、書写者の約四分の一を僧侶が占めており、さらに、そのうちの半数以上が天台宗の僧侶である。これらには、どのような意味があるのだろうか。大正本書写当時の宗派の規模や、人物関係などが影響していると考えられるが、『花鳥余情』が、その一因であると考えられる。

『源氏物語』の注釈書

源氏物語の注釈は、『花鳥余情』を境にして、古注と旧注に峻別される。⁽⁷⁾『花鳥余情』は、『河海抄』の誤りを訂正し、また、不足部分を補った注釈書で、全三十巻。一条兼良（以下、兼良）が応仁元年（一四六七）頃より執筆し、文明四年（一四七二）に成立したもので、作者に関する説、紫式部という名前についての説、著作の動機や、『源氏物語』の批評などを著したものである。注釈は、本文を抽出し、解釈は文意をとるとい

ころに特徴が挙げられ、文章の理解に力を注いだところが、注釈としての進歩がみられるものである。そして、注目するべきところは、今までの古注が故事、出典、引き歌などの説明が中心であったのに対して、注釈にあたって『花鳥余情』は天台教学を応用した点にある。⁸⁾

少し長くなるが、具体例を示したい。⁹⁾

よろづの事によそへておほせ

第八段又馬頭か詞也雨夜の物語はしめは女のしな心むけのよしあしきを物にもたとへすありのまゝにかきたり此段よりは又木のみちゑ所てかきこの三の芸にたとへて人のまことありいつはりある事をのふ此下段にはそのはしめの事すきくしくともきこえんとておのゝむかしありし事ともたかひにかたり出すかくのこく三段にかきわけたること葉のつゝきひとへに法華経の三周説法のすかたをかたとれり三周とは法説一周喩説一周因縁説一周也法説一周は方便品也此品は直に妙法の道理をとき給て上根の声聞舍利弗にたいしてさとらせしむこれを法説といふ次は喩説一周は譬喩品也此品のはしめには法説の述成授記ありこれまでも舍利弗に対しての説法也その次の段に三車一門のたとへをかりて三乗つゝに一乗に帰するおもむきをのへて中根の声聞須菩提迦旃延迦葉目蓮にさとらせしむ信解品菓草喩品までも喩説の述成記也次に因縁説一周は化城喩品也品は過去久遠却に大通智勝仏といふ如来の法花を説給ふをきゝし人の中此退屈の思をなして小乗を修行せしかいま又尺尊の説法をきゝて回心向大の声聞となる因縁をときて下根の千二百人に次第に授記し給ふかの法理を直にとくとたとへをかりていふと過にかたの因縁をとくとこの三周のすかたいまの物語の作りさまにあひにたるなり世俗文字の業狂言綺語の誤をあらためて讚仏乗の因縁法輪の縁とせる心なり下の詞に中将いみしう興してのりの師の世のことはりときゝかせん所の心ちすといへるこのことはりをおもひてかけるなるへし

この「よろづの事によそへておほせ」は、帚木卷の「雨夜の品定め」の場面で、左馬頭が指喰いの女の話をする前に、光源氏や頭中将に対して、人の心の、その場限りの見せかけの風情が、あてにできないという論を、指物の職人、宮中の絵描きの名人、字を書く人物の素養の有無の、三例になぞらえて語っている部分である。語り終えた

後、地の文にて「法の師、世のことわり説き聞かせむ所の心地する」と、まとめていふことからも、仏教的意識がみてとれる。この部分を含め、「雨夜の品定め」が、法華経の三周説法である、方便品の法説、譬喩品の喩説、化城喩品の因縁説になぞらえていると、『花鳥余情』では解説しているのである。

また、次の部分も、解釈に天台教学を応用している。

ほとけのいとゆるわしき心にてときをき給へるみのりにもほうへんといふ物ありてしはらく天台宗の義によらは法花を真実とさたむるにつきて余前の諸教をは皆方便といへり方等経は五時経の中第三時にあたる大乘教の初門也浄名思益等の経なり小乗を弾斥して大乘を褒美する故に方等部をは彈呵褒貶の教といふ二乗に對してとき給ふ故もおほよそ仏の方便はいかにも衆生の機をかゝみて説給へる故になき事もあるといひ又ある事をもなしとの給ふこゝにいへる事かしこには又かはれるいづれを誠と決定しかたし所詮は衆生の万機をとゝのへてつゝに一笑道に帰せしめてひとつむねにおさむるなり三界唯一心々外無別法の道理なり煩惱と菩提とはたとへは水と氷のことし水と氷とはたゝ一性なりまよへは菩提の水こほりとなるさとれば煩惱のこほり水となるかことしまたく各別の物にあらず善悪不二邪正一如の理なればしはらくよきあしきはかりのかはりめなりよくいへはなに事もむなしからすとほかゝるゑ物語かな草子などもこれによりて益をほとこせはすなほち方便の諸教とさらにかはる所なかるへしとほとけの御のりをひきかけてことはりをのへ給ふなり

これは逆巻で、物語に熟中する玉鬘に対して、光源氏が物語論を語る場面である。物語とは、虚構の集合で構成されたものであるが、その虚構の中に、人間の真実を描くものであると語り、それが方等教で説かれ、菩提と煩惱が表裏一体なのと同じであると語っている。そして、『花鳥余情』は、菩提と煩惱の部分に関して、「水」と「水」に例えて詳しく解説しており、天台教学に対して、深い理解があつたことがうかがえる。これらのことを踏まえると、『源氏物語』を描写するには、単に能書家であるだけではなく、やはり、『源氏物語』に対する知識や、しっかりとした内容把握が求められていたのではと考えられそうである。そして、『花鳥余情』の天台教学を応用した点が支持され、書写者を選定する際に、天台宗関係者を多く含めたのではなからうか。

また、『花鳥余情』の著者である兼良の次男の一条関白冬良公（以下、冬良）が書写者の中に入っているのも、非常に興味深い事実である。冬良は、大正本の書写が始まった延徳二年には、既に関白であり、書写が終わったとされる明応二年には太政大臣になっていることから、当時の絶対的な権力者であることがわかる。このようなトップレベルの者が、煩雑な政の中、書写に携わったのも、やはり、『源氏物語』の知識という点が、重く考慮されたのではなからうか。冬良は、父兼良の学才を受け、『新撰免玖波集』¹¹を関白として選進し、さらには序文を著している。この点からも、兼良から十分な天台教学について学んでいると推測され、『源氏物語』の解釈にあたって、天台教学を活用できたと考えられるのである。

大正本の背景にある天台宗

さらに、大正本の書写者による、天台宗に関連する書籍を調査した結果、かなりの数があることが判明した。本稿の末に附した表は、『昭和現存 天台書籍綜合目録』¹²（渋谷亮泰 法蔵館 昭和五十三年）に掲載されているものを参考にしたデータで、これらは、著者や、書写者、または奥書等に、その名前が出てくる書籍一覧である。なお、『書籍備考』の「奥書」とは、奥書に、その名前が見受けられるものである。

数が多い順に述べていくと、尊鎮が三十六本、堯胤が十本、應胤が六本、忍継が五本、眞賢が二本、堯恵、蓮空、基綱、増運が一本ずつである。なお、忍継は徳大寺太政大臣實淳（以下、實淳）、眞賢は万里小路賢房（以下、賢房）、蓮空は甘露寺大納言親長（以下、親長）の、それぞれの法名であり、基綱は姉小路基綱（以下、基綱）のことである。ただ、眞賢に関しては、その著書に自筆の序文があり、『昭和現存 天台書籍綜合目録』によると、「寶永……」と始まることから、年代に矛盾が生じ、別人と思われる。

この中で、特に、基綱の名が見られるのが、非常に気になる点である。基綱は、最終巻の書写を担当していることから、大正本書写にあたっての責任者や発起人と考えられる。このような重要な人物が、天台書籍に関与しており、さらには、法名ではなく「基綱」の名で出てくることは、興味深い点である。この『禁中御八講記』は仏教教学振興の目的も考慮したと考えられており、天台教学と大正本書写の関連を示唆する資料と思われるが、精査、精読が未了であるので、その他の書籍の性格、大正本、天台教学などの調査も含め、今後の課題としたい。

このように、天台宗に関する書籍の数も、多くあることから、天台教学の知識と、大正本の関わりは薄いものではないということが窺える。早急な結論付けは避けたいが、先述したように、天台宗関係者を意図的に多く、書写者として選定した可能性も充分にあると考えられる。

公家の中心人物

先にも触れたが、拙稿にて歌人を中心とした大正本の書写者の相関関係を考察した。しかしながら、その際、公家の相関関係を考察することができなかったため、本稿で、少しばかりだが、私見を述べたい。

前田雅之は、『永享百首』の冒頭十首を挙げ、次のように述べている。¹³

後花園天皇・貞成親王・関白二条持基・前摂政一条兼良・將軍義教・前右大臣三条公冬と続く序列は、構想段階と変わらない。また、門跡の参加はなかったけれども、沙弥淨喜・性脩によつて僧侶がいらないわけではない。後花園の父親貞成は無品故にまだ後崇光院という「院」ではない。しかし、見ようによつては、やや苦しいものの、この十人の序列を「院・天皇―公家・寺家・武家」からなる「公」秩序の具体化とすることは不可能ではない。

と、当時の足利政権である「武家」が、それまでの、歌合や、歌集編纂などの、公的行事の秩序であった「公」（院・天皇―公家・寺家）に組み込まれる努力をし、それが成つたことを指摘している。その「武家」を除いた、従来の「公」の形に注目すると、大正本の書写者と同じ構成であることに気付く。堯胤は、「寺家」の代表ともとれるが、伏見宮貞常親王の子であり、「院・天皇」の血筋の代表とも考えられる。¹⁴「公家」に相当する人物は、関白である冬良をはじめとして多数いるし、「寺家」もまた、これまで述べてきたとおりである。

また、前田は、歌合のメンバーに注目し、それが親長家の月次会が母体であり、親長交流圏が当時の重要な交流圏だったと指摘している。

実際に、前田が挙げている歌合のメンバーの中には、勸修寺家や万里小路家、中御門宣胤（以下、宣胤）の名前があり、さらには飯尾家、三善家の名前が多数挙がって

いる。これは、大正本の書写者とマッチするのである。勸修寺家、万里小路家は前掲した常信、賢房がその家系の人物であるし、宣胤は「中御門大納言宣胤卿」と、「行幸」藤袴「鈴虫」「紅梅」の四つの巻の書写者として極札に、その名が書かれている。また、詳細が不明な人物として、「飯尾常房三善氏息女」なる人物が、大正本の書写者の一人であるが、これは、先述した、飯尾家、三善家の人物であろう。

これらを総合すると、親長家で開催された歌合のメンバーは、大正本の書写者と非常に関わりが深いことがわかる。親長が公家の中心とした相関図の整理は、まだ充分ではないが、その考えを基に、今後の研究、調査をすすめていきたい。

おわりに

以上のように、概説的にはあるが、大正本の書写者について、新たな見地から、その関係性をまとめた。書写者の天台宗関係者の人数、また、天台書籍の数や、『花鳥余情』の注釈書の影響なども鑑みると、大正本と天台宗の関係は、密接なものといえそうである。また、親長の交流圏の人物も非常に重要だと考えられる。これら二つの事項を、より深く研究、調査することによって、大正本の書写経緯や、その目的が究明されると思われる。現段階では、まだ、その概要を掴んでいるに過ぎず、課題は山積しているが、これらひとつひとつを整理し、大正本について究明し、ひいては、書写をされた時代である、室町期の文人たちの新しい姿を解き明かしていきたい。

註

- (1) 詳しくは「大正大学蔵『源氏物語』研究——書写者の相関図から見えるもの——」（『国文学試論』第二十一号 平成二十四年三月）を参考にされたい。
- (2) 同(1)
- (3) 実相院は、静基僧正が開山した、元天台宗の寺院である。
- (4) 勸修寺は、京都市山科区にある門跡寺院。真言宗山階派大本山である。
- (5) 相国寺は、京都市上京区にある臨済宗相国寺派大本山の寺である。
- (6) 宝鏡寺の中にあつた末寺で、浄土宗寺院であつた大慈院か。『親長卿記』に後花園天皇の六十七日の仏事として法華経の一部の写経があつたとされるが、詳しくは不明だが、近時、三角洋一先生より、大慈院は皇子であるという御教授を賜つた。

- (7) 伊井春樹ほか編『講座源氏物語研究第三巻 源氏物語の注釈史』（おうふう 平成十九年二月）
- (8) 三角洋一「源氏物語と仏教」（仏教文学会合同例会資料 平成二十三年 十二月）
- (9) 本文の引用は、伊井春樹編『松永本 花鳥餘情』源氏物語古注集成第一巻（おうふう 昭和五十三年四月）に依る。
- (10) 本文は『源氏物語』① 新編日本古典文学全集（小学館 平成六年三月）に依る。
- (11) 『新撰菟玖波集』は宗祇を中心として、宗長、肖柏らの協力により撰集され、明応四年（一四九五）成立したものであるが、宗長、肖柏らは、大正本の書写者である。また、大正本の書写者の多くが、同集に入集していることから、なんらかの関係性が見て取れる。
- (12) 同(1)
- (13) 「和歌は〈公共圏〉を生み出す——室町期武家詠作から」（『聖なる声——和歌にひそむ力』三弥井書店 平成二十三年五月）
- (14) 前田氏に話を伺ったところ、「非常に難しいが、どちらの立場とも取れる」との見解をしめされた。

著者	カテゴリ	書名	書籍備考	著者備考
	許可 三昧流印信密印	胎金印信 得佛記	奥書	
	穴太流 法曼流印信	蘇許 戒光	奥書	
	辨才天法	宇賀神秘密念誦	本人筆、奥書	
		門室歴代相承鎮護國家十箇條秘密念誦 一、二間夜居加持 二、後宮易差授成 三、温明殿秘密念誦 四、第二温明殿秘密念誦 五、日月兩門安鎮 六、震朝日出觀行 七、紫宸殿鎮座 八、第一仁壽殿密行 九、天子即位灌頂 十、鎮護國家十條秘密念誦目錄	奥書	
苑胤	題教血脈・世譜系譜	山寺諸門系圖	本人筆、編者私註に名前あり	「須磨」「総合」「常夏」を書写。
	座主記録	座主記 座主次第 西塔院主次第 法性寺座主次第等	編の私注、苑胤迄追記	
	比叡山堂供養記・比叡山各坊各谷記録	永正十五年中堂供養記	私註に名前あり	
	日光山記・書寫山記	華嚴灌記	本人筆	
	天皇聖忌記	魚山の御のり	本人筆、また異本の奥書に名前あり	
	天皇聖忌記・門院忌記	延徳二年御入講記 梨本苑胤親王御自筆記	本人筆	
	御儀法講記	御儀法講記 苑胤親王筆	本人筆	
	御儀法講記	御儀法講記次第	本人筆	
苑惠	和歌紀・行文	善光寺紀行	本人撰	「松風」「薄雲」を書写。
	四教儀	冠註天台四教儀集解文林	本人撰	
眞賢	四教儀	天台四教儀集解卷上科圖	本人撰	「眞賢」は賢房の法名だが、時代が合致しない。 「初音」を書写。
	他流聲明・聲明雜部	催馬柴注秘抄	本人写	
蓮空	門院忌記	禁中御入講記	本人筆	「蓮空」は親長の法名。「夕顔」を書写。 「夢浮橋」を書写。
基綱	圓成義	圓成秘決要集	相承に名前あり	「野分」を書写。
増運	靈驗記・勸進記	大講堂勸進帳序	奥書に「應胤親王御筆」とあることから、本人筆か。	
	綱教血脈	天台門流系圖	編者の私註に「應胤事」とある。	
應胤	辨才天法	五箇秘印	奥書	「桐菰」を書写。 ※大正本の書写時期と、應胤の生存時期から鑑みると、「桐菰」自体、後に書写し、補ったものか？
	講式	慈惠大師法則	奥書	
	灌頂問書西山流	瑜伽口決覺	奥書	
	記録部	大講堂勸進帳序天文二三年	奥書に「梶井應胤親王御筆」とあることから、本人筆か。	
	座主記録	舜任親王再任座主宣下記	本人	
	比叡山各坊各谷記録	無動寺明王堂等焼失一件記	本人	
	門院忌記	新辨平門院御葬送記	本人	
忍継	御修法記	豊皇出現中堂御修法記	本人	「忍継」は眞淳の法名。 「関屋」を書写。
	座主記	座主宣下 宣命使登山要日記	本人	

著者	書名	書籍備考	備考
カテドリ	書名	書籍備考	備考
戒記録	桂通院尊鎮親王御得度記	書名	各巻の外題を担当。 ※大正本の書写時期と尊鎮の生存時期から鑑みると、完成後、しばらく後に外題を添付したと考えられる。
瑜神経	秘録鈔	表紙書	
儀軌註	経軌目録也上桂林	別筆	
事相口決	五八帖抽書	尊鎮撰	
伝授作法	附法事宮闈	奥書	
許可	許可	包紙に名前あり	
三味流印信密印	金剛密印三昧	奥書	
雑印信	印信切紙	書写	
雑印信	秘録四箇印明	表紙書	
諸尊法	師説集	本人筆を舜興が書写	
薬師法	三味流薬師初行次第	奥書	
釋迦法	釋迦行用	奥書	
熾盛光法	熾盛光次第	別筆	
灌頂経法	灌頂経	奥書	
普賢法	普賢行用抄	奥書	
求聞持法	求聞持	奥書	
地藏法	地藏行用	奥書	
軍荼利法	軍荼利見修抄	奥書	
五大尊合行法	五大尊合次第并纏摩	奥書	
北斗法	大永四年禁裏北斗法記	本人筆	
北斗法	北斗法奥書	奥書	
除病法	伝屍病治方秘伝	奥書	
密雑法	行法頌	奥書	
密雑法	恵心僧都修学二事作法	本人筆	
曼荼羅	曼供次第	奥書	
密教雑部	愚現抄	書写、奥書	
講式	追善講式	本人筆	
講式	慈恵大師講式略	本人筆	
世譜系譜	青御門主系図	尊鎮入滅まで	
座主記録	天台座主記	尊鎮親王まで	
座主記	□已■(□と■は該当漢字なし)	朱書き(□は山偏に「務」の旁。■は木冠に心)	
諸寺縁起	眞如堂縁起	跋文、尊鎮撰	
勸進帳	天文一六年七月日眞如堂勸進帳	奥書	
御修法記	長日御修法	本人筆、奥書	
和歌・紀行文	愚問賢答問書	尊鎮説、奥書	
密教部	両部灌頂密印	奥書	
密教部	自私自記	奥書	